

東洋學叢

「東山法門」の人々の傳記について(上)

伊吹 敦 (1)

Pathamasambodhi 第一四章

Parinibbānakathā 訳注研究(1)

岩井 昌悟 (95)

vyavahāra 概念の変遷

沼田 一郎 (105)

『ゴラクナート語録』研究

—「サブデー」(二〇一〜二五〇)の本文と和訳—

橋本 泰元 (119)

『マツヤ・プラーナ』第一八四章：和訳と註解

—『マツヤ・プラーナ』所収の

「ヴァーラーナスイ・マーハートミヤ」

について(3)—

宮本 久義 (134)

東洋大学文学部紀要第62集

インド哲学科篇

XXXIV

研究室報告

① 本年度の新入生歓迎行事として「新入生研修旅行・秩父礼所巡り」を行った。平成二十年は「日本百番観音報恩総開帳」にあたり、秘仏をじかに参拝できる貴重な機会であった。三十四所から、札所一番（誦経山四萬部寺）、札所二十三番（松風山音楽寺）、札所三十一番（鷲窟山観音院）の三ヶ所を選び、バスで巡った。新入生には大いに好評で、学生相互あるいは教員との交流を深めることができた。関係各位には厚く御礼申し上げます。

② 本年度は、学祖井上円了博士生誕一五〇年記念にあたり、「東洋大学文学部伝統文化講座」の催しとして、真言宗豊山派迦陵頻伽聲明研究会の皆様の御協力を頂き、六月二十一日に奈良・長谷寺勤行「ほとけへの祈り」の公演を開催し、大勢の来場者で賑わった。出演者の皆様には厚く御礼申し上げます。

③ 本年度、特別講義を拝聴した外国の先生は左記の方である。
ラマーシユ・クマール・パーンデー博士（シユリー・ラールバ
ハードウル・シャーストリー大学教授）「バンディットの生活と思想」、平成二十年六月十九日（宮本ゼミと橋本ゼミの
共催）

ジヨナサン・シルク博士（オランダ・ライデン大学教授）、「唯

識と共生」、平成二十年十二月二十四日（共生思想研究センター）とインド哲学科共催）、「維摩経について」、平成二十一年一月六日（渡辺章悟教授の大学院の講義の時間に開催）

④ 本年度も大学院の研究発表会を春学期（七月二日）と秋学期（十一月二十六日）に公開にて開催した。前期の発表者は、伊藤慶（M2）、井原知子（M2）、相川愛美（M2）、鈴木貫太（D2）、馬場えつこ（D3）の五名、後期の発表者は、加藤千絵（M2）、三澤祐嗣（M2）、橋爪浩昭（M2）、チャイトンディー・プラチャツボン（D1）、アラムラット・スタッス（D3）、ウリジジリガラ（M2）、板野義弘（M2）、天野まゆこ（M1）、澤田容子（M2）、林 香奈（D3）の十名であった。

⑤ 本年度のティーチングアシスタントは、板野義弘君、三澤祐嗣君、鈴木貫太君、馬場えつこさんが担当した。

⑦ 本年度の卒業論文・制作の提出者は、I部が五〇名、II部が四名であり、大学院の修士論文提出者は一〇名であった。本年度の優秀論文に対する褒賞は左記の通りである。

・校友会奨学基金

学 部 園田沙弥佳（I部）、長澤英明（II部）

大学院 相川愛美

・勸学奨学基金

学 部 石坂歩美（I部）、上野絢子（II部）

・田村芳朗奨学基金

学部 相川裕保、尾形優、中島寿丸（I部三名、II部

該当者なし）

大学院 澤田谷子

平成二十年度業績(平成二十年一月～十二月)

竹村牧男

△論文▽

「『記事究明としてのエコ・フィロソフィ』(単著、『エコ・フィロソフィ研究』第二号、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ「TEEP」、平成二十年三月、三一～四九頁)

「宗教と社会活動——還相の問題をめぐって」(単著、『共生思想研究センター年報』二〇〇七、東洋大学共生思想研究センター、平成二十年三月、四七～六〇頁)

「西田幾多郎の仏教—真宗との関わりを中心に」(単著、『日本の哲学』第九号(日本哲学史フォーラム)、平成二十年年十二月、六八～八五頁)

△その他▽

「重々無尽のいのち——『華嚴五教章』を読む」(単著、『大法輪』平成十七年八月号より、毎月連載、平成二十年一月号で完結)

「解説」、金山穆韶・柳田謙十郎『日本真言の哲学』(単著、大法輪閣、平成二十年二月、三四六～三五八頁)

「仏教と科学 その要素還元主義の立場をめぐって」(単著、シリーズ往復書簡「生命への問い——仏教と科学との接点を求めて」五、『春秋』四月号、春秋社、平成二十年四月、一九～

二二頁)

「自己の構造 場所の論理と華嚴の世界観」(単著、同七、『春秋』六月号、春秋社、平成二十年六月、二六～二九頁)

「場所的存在感情から歴史創造の主体へ」(単著、同九、『春秋』十月号、春秋社、平成二十年一〇月、九～一二頁)

「大乘經典をつらぬくもの」(単著、『サーム』五月号、水書房、平成二十年五月、二～七頁)

「仏教とエコ・フィロソフィ」(単著、『在家仏教』六月号、在家仏教協会、平成二十年六月、四二～五七頁)

対談「日本の霊性と共生」(山折哲雄・竹村牧男・佐々木勉郎、市民公開フォーラム「サステイナビリティと共生のこころ」、『ライフサイエンス』第三十五号、社団法人生命科学振興会、平成二十年十一月、二一～七四頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会(評議員)／日本宗教学会(理事)／比較思想学会(理事)／仏教思想学会(理事)／東方学会(会員)

研究発表

「日本仏教とエコ・フィロソフィ」(第四回韓国仏教学結集大会、平成二十年五月十七～十八日(発表は一八日)、於東大、ソウル)

「環境問題と仏教思想」(北陸宗教学会シンポジウム「環

境問題と宗教文化」、平成二十年七月十三日、金沢市）
「空海の密教思想と華嚴思想」〈The Esoteric Doctrine of
Kukai and the Kegon Thought〉（第二回国際華嚴学会ハ
The Second International Huayan Symposium）、平成
二十年八月七～十日（発表は八日）、パリ市南部郊外ペレバ
城ホテル）

「学問と社会および宗教学と現代——仏教学等をふまえてつづ」
（日本宗教学会第六十七回学術大会公開シンポジウム「現代
社会における宗教学の役割を問う」、平成二十年九月十三日、
筑波大学大会館小ホール）

「仏教思想の社会的役割について——サステイナビリティと
の関連におそつ」(ICAS・TEPH 共催国際セミナー「持続
可能な発展と自然、人間——西洋と東洋の対話から新しい
エコ・フィロソフィを求めて」、平成二十年十一月八日、茨
城県南生涯学習センター多目的ホール〔土浦市〕)

木村競「サステイナビリティ学における哲学の役割」に対す
るコメントーター（サステイナビリティ学連携研究機構
(IR3S)・東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシ
アティブ (TEPH) 共催「哲学セミナー」、平成二十年十
二月六日、白山校舎六号館六二〇九番教室)

△講演▽

素修会例会「仏教と社会——還相の問題をめぐるつづ」(平成二
十年五月十三日、日本工業倶楽部〔東京・丸の内〕)

学祖祭「学祖・井上円了博士における哲学と宗教」(平成二十
年六月六日、蓮華寺〔中野区〕)

鈴鹿短期大学ライフセミナー「環境問題と日本思想」(平成二
十年六月一四日、鈴鹿短期大学)

白百合大学「宗教と文学」オムニバス講義「道元と文芸——冬
の美学をめぐるつづ」(平成二十年六月二十七日、白百合女子
大学)

在家仏教協会講演会「大悲ものうきことなし——大乘仏教のこ
ころ」(平成二十年七月二十六日、大手町ビル)

NPO法人環境経営学会・サステイナブル経営研究委員会第五
回会議「地球社会のサステイナビリティの基盤を考える」
(平成二十年八月一日、日本品質保証機構会議室〔東京・丸
の内〕)

社団法人生命科学振興会北海道支部例会・市民公開フォーラム
「サステイナビリティと共生のこころ」にて山折哲雄氏と対
談「日本の霊性と共生」(司会(座長)は、佐々木勉郎氏、
平成二十年八月二三日、かでる二・七〔札幌市〕)

△研究プロジェクトへの参加▽

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ
(TEPH)・自然観探究ユニット代表者(機構長・松尾友矩
〔東洋大学〕)

東洋大学共生思想研究センター長

△教育活動▽

学内担当科目

学部・日本仏教史(Ⅱ部)

インド哲学仏教学演習⑦(Ⅰ部)

全学総合ⅠA(Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ)一回担当

「比較文化・文明①(比較思想)」(五月二十九日)

宗教をめぐる諸問題A(Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ)一回担当

当

「日本仏教における信仰と修行」(四月十九日)

校友会寄附講座(Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ)一回担当

「東洋大学の現在——共生をめざして」(九月三十日、二限)

大学院・日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ(前期課程)

仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ(後期課程)

学外担当科目

上智大学文学部・仏教思想Ⅰ・Ⅱ

茨城大学農学研究科・緑環境システム科学特別講義Ⅰ、集中

講義、平成二十年十一月十八日、十二月一日

△大学・学部管理・運営活動▽

文学部長／評議員／東洋学研究所研究員

△社会的活動▽

講座「空海——心の奥なる世界を尋ねて」(東洋大学生涯学習

センター公開講座・エクステンション学習講座B△東洋思想への誘い▽、平成二十年十月四日、東洋大学白山キャンパス)

宮本久義

△論文▽

「ヒンドゥー聖地巡礼の作法——『カーシー・ラハスヤ』中のパンチャクローシー巡礼をめぐる」(単著、『多民族社会における宗教と文化』十二号、宮城学院女子大学、平成二十年三月、一九〜三七頁)

「叙事詩の世界を生きる神劇——ラーム・リーラー」(単著、『神話と芸能のインド』(鈴木正崇編)山川出版社、平成二十年八月、七一〜九〇頁)

△その他▽

「新仏教(ネオ・ブッティズム)と現代インド」(単著、『浅草寺仏教文化講座』第五二集、浅草寺、平成二十年八月、一二二〜一三七頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本南アジア学会(平成十九年十月〜二十年九月、常務理事)

／日本印度学仏教学会(評議員)／日本佛教学会(会員)／

建築史学会(会員)／早稲田大学東洋哲学学会(会員)

学会開催

日本南アジア学会第二十一回全国大会(東洋大学白山キャン

パス)

／日本南アジア学会(平成十九年十月〜二十年九月、常務理事)

／日本印度学仏教学会(評議員)／日本佛教学会(会員)／

建築史学会(会員)／早稲田大学東洋哲学学会(会員)

学会開催

日本南アジア学会第二十一回全国大会(東洋大学白山キャン

パス、九月二十七、二十八日)の実行委員長として開催の準備に従事

研究発表

「ヒンドゥー教の聖地形成におけるイスラームの関与——北インドの聖地バナラスを事例として」(東洋大学東洋学研究所研究例会、平成二十年十一月八日、東洋大学白山キャンパス)

△調査活動▽

「奈良・京都の寺社における神仏習合の諸相調査」(東洋大学共生思想研究センター、センター長・竹村牧男「東洋大学」、平成二十年六月十四日、十五日、奈良市・京都市)

△研究プロジェクトへの参加▽

「東洋における聖地信仰の研究…ヒンドゥー教と仏教における聖地巡礼成立の要件」平成二十年度東洋大学東洋学研究所学術プロジェクト、研究代表者としてインド思想・宗教における聖地信仰の研究とプロジェクト全体の統括に従事

「東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、サステイナビリティ学連携研究機構(TEP)」(研究員、機構長・松尾友矩「東洋大学」)自然観探究ユニットに属し、「インドの自然観」の研究を行う

「東洋思想に基づく「共生学」の構築」東洋大学共生思想研究センター(研究員、センター長・竹村牧男「東洋大学」)「古代インド哲学思想と共生思想の研究」を行い、第二回研究会で「神と人を繋ぐ神劇ラーム・リーラー」平成二十年五月二

十一日、第四回研究会で「インドの野外劇ラーム・リーラーにおける共生の問題」平成二十年六月十八日、を発表。

△教育活動▽

学内担当科目

学部…インド古典哲学A・B (I部)

インド現代思想A・B (I部)

インド文化論II A・B (II部)

インド哲学仏教学演習② (I部)

全学総合IA (I・II部乗り入れ) 一回担当

「インド思想とエコ・フィロソフィ」(六月五日)

宗教をめぐる諸問題A・B (I・II部乗り入れ) コー

ディネーター

「信仰と修行」(四月十二日)

「戒律と禁欲」(十月四日)

大学院…サンスクリット文献研究I・インド哲学研究指導I

(前期課程)

インド哲学特殊研究I・インド哲学研究指導I(後

期課程)

学外担当科目

インド哲学仏教学特殊研究「サーンキヤ思想の研究」(東京大

学文学部・大学院人文社会科学研究科、夏学期)

総合講座「東洋医学の人間科学」中、「ヨーガとアーユルヴェー

ダ」を担当(早稲田大学人間科学部、平成二十年十月三十一

日・十一月七日)

△社会的活動▽

講座「ガーデンテイラー——インド独立への希望と挫折」、東洋大
学生涯学習センター・エクステンション学習講座B「東洋思
想への誘い4」、平成二十年五月十七日、東洋大学白山キャン
パス

講演「多宗教・多民族国家インド——共生社会への模索」国際
仏教興隆協会、平成二十年十一月二十五日、南青山・梅窓院
祖師堂

△大学・学部管理・運営活動▽

インド哲学科第一部主任／東洋学研究所研究員・運営委員／東
洋大学共生思想研究センター運営委員／東洋大学「エコ・フィ
ロソフィ」学際研究イニシアティブ、サステイナビリティ学
連携研究機構 (TIEPh) 研究員

橋本泰元

△論文▽

“A Study of an Aspect of Kabir's Bhakti with the Text
and Translation of the the Gyāna Gaunīśa in Kabir's
Briak” (単著、『中世ヒンドゥイズムにおけるバクティ運動
の歴史的展開』△平成十七年度～平成十九年度科学研究費補
助金「基盤研究 (B)」研究成果報告書 (研究代表者：山下博
司) [東北大学]▽二〇〇八年三月十六日、二一九～二二六頁)

「ゴータクナート語録」研究—「サブディー」(四二～一〇〇)
の本文と和訳」(単著、『東洋学論叢』第三十三号△東洋大学
文学部紀要第六十一集▽二〇〇八年三月三十日、一三二～一
四七頁)

「ヒンドゥー教とイスラーム教の共生——△境界性▽という視点か
ら」(単著、『東洋的知に基づく「共生」思想の研究』△平成
十八年度～平成十九年度科学研究費補助金「基盤研究 (C)」
研究成果報告書 (研究代表者：竹村牧男) [東洋大学]▽二〇
〇八年三月三十一日、六五～七三頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学佛教学会 (理事) / 日本宗教学会 (会員) / 日本
南アジア学会 (会員) / 日本佛教学会 (会員)

日本南アジア学会第二十一回全国大会開催 (九月二十七・二
十八日、東洋大学) 事務局長

△研究プロジェクトへの参加▽

「ヒンディー・ウルドゥー韻律のリズム構造の解明——ペルシア
起源説の検証をとおして——」△平成二十年科学研究費補助
金「基盤研究 (B)」研究代表者：長崎広子 [大阪大学] 研究
分担者▽

「東洋における聖地信仰の研究——ヒンドゥー教と仏教における
聖地巡礼成立の要件」(平成二十年東洋大学東洋学研究所学
術プロジェクト、研究代表者：宮本久義 [東洋大学]、研究分

担者

東洋大学共生思想研究センター 研究員（センター長）竹村 牧男

〔東洋大学〕

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ

(TIEP) 研究員（機構長）松尾 友矩〔東洋大学〕

△教育活動▽

学内担当科目

学部・インド学仏教学への誘い B（Ⅱ部）

インドの宗教 A・B（Ⅰ・Ⅱ部）

ヒンディー文献講読 A・B（Ⅰ部）

インド学仏教学演習① A・B（Ⅰ部）

宗教をめぐる諸問題 A・B（Ⅰ・Ⅱ部 乗り入れ） 一

回担当

「ヒンドゥー教における信仰と修行」（六月十四日）

文学部伝統文化講座「聲明講演」（六月二十一日 主

催）

校友会寄附講座（Ⅰ・Ⅱ部 乗り入れ） 一回担当

「哲学館初期のカリキュラムの特色 ― 哲学を如

何に教育するのか」（八月八日、四限）

大学院・インド哲学研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅲ（前期課

程）

インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ（後

期課程）

学外担当科目

大正大学学部・ヒンディー語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

△大学・学部管理・運営活動▽

自然科学委員会委員／教職課程運営委員会委員／文学研究科年

次刊行物委員会委員／東洋学研究所研究員／東洋大学共生思想

研究センター運営委員

△社会的活動▽

団体役員等

大法輪石原育英会評議員

学術講演／一般講演／講座等

講座「インドの共生思想―中世民衆宗教家の立場から―」

（東洋大学生涯学習センター公開講座・エクステンション

講座 B △ 共生への道を求めて―東洋の心に学ぶ▽、平成二

〇年十一月一九日、東洋大学白山キャンパス）

渡辺章悟

△論文▽

Vajracchedikā Prajñāpāramitā Manuscripts in The

Schøyen Collection IV, Buddhist Manuscripts Volume 3,

General Editor: Jens Bratvig. Oslo: Hermes Publishing,

2007. pp.89-132. (Paul Harrison との共著)

△その他の業績▽

「大乘仏教論」『仏教文化』第一三四号、東京国際仏教塾、平成

二十年八月十日、一〇〇一三頁

〔寺田福寿と仏青運動―椎尾辨匡の共生運動への展開(1)〕

〔共生思想研究年報二〇〇七〕、東洋大学共生思想センター編、平成二十年三月、六三〇八五頁

〔新・般若心経〕入門〕第十八回 「原典から読む『般若心経』

(12)―『心経』の讃嘆―(『大法輪』一月号、平成二十年一月、一四四〇一五二頁)

〔新・般若心経〕入門〕第十九回 「般若心経』の展開(1)―「インド・チベット①」―(『大法輪』二月号、平成二十年二月、一五二〇一五九頁)

〔新・般若心経〕入門〕第二十回 「般若心経』の展開(2)―「インド・チベット②」―(『大法輪』三月号、平成二十年三月、一六六〇一七三頁)

〔新・般若心経〕入門〕第二十一回 「般若心経』の展開(3)―「中国の注釈①」―(『大法輪』四月号、平成二十年四月、一五六〇一六三頁)

〔新・般若心経〕入門〕第二十二回 「般若心経』の展開(4)―「中国の注釈②」―(『大法輪』五月号、平成二十年五月、一五二〇一五九頁)

〔新・般若心経〕入門〕第二十三回 「般若心経』の展開(5)―「日本における信仰」―(『大法輪』六月号、平成二十年六月、一六六〇一七三頁)

〔新・般若心経〕入門〕第二十四回 「般若心経』の展開

(6)―「日本人による『心経』の注釈」―(『大法輪』七月号、平成二十年七月、一六八〇一七五頁)

〔新・般若心経〕入門〕第二十五回 「般若心経』と日本文化―「呪文としての『般若心経』と文学」―(『大法輪』八月号、平成二十年八月、一七八〇一八五頁)

〔新・般若心経〕入門〕第二十六回 「般若心経』の泉を汲み取る―「絵心経」と円了「大正般若心経」―(『大法輪』九月号、平成二十年九月、一七六〇一八三頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会(理事・常務委員・評議員・企画編集委員会委員) / 日本西藏学会(委員) / 日本宗教学会(会員) / 日本佛教学会(会員) / 仏教思想学会(会員) / 東アジア仏教学会(会員) / 国際仏教学会 IABS(会員) / 国際真宗学会会員

研究発表・シンポジウム

〔在家菩薩としての Saipurusā (Saipurusā as a Bodhisattva of lay follower)〕韓国仏教学結集大会、東国大学(韓国)、平成二十年五月十七日

〔慈悲と共生―仏教的共生の理念と現実―〕第二十一回日本南アジア学会・全体シンポジウム(テーマ・南アジアにおける《共生》の諸相と展望)での発表、於東洋大学白山校舎、平成二十年九月二十八日

「失われる共生・求められる共生」平成二十年度天台宗教学大会基調講演（教学大会の共通テーマ：現代社会と仏教）、叡山学院講堂（滋賀県）、平成二十年十一月六日

「大乘仏教の起源」国際仏教学シンポジウム・創価大学国際仏教学高等研究所（全体のテーマ：The Mahāsāṃghika School, Mahāyāna and Gandhāra — The Encounter of Buddhist Art and Archaeologists with Buddhist Philologists 大衆部 大乘、ガンタラー—仏教美術史・考古学と仏教文献学の出会い）、平成二十年十一月三十日

「インド思想における共感と共苦」東洋大学共生思想センター主催国際シンポジウム（全体のテーマ「アジアの文化と共生のかたち」）東洋大学井上円了ホール、平成二十年十二月二十日

学会参加

日本印度学仏教学会第五十九回学術大会に参加（平成二十年九月三日～五日、愛知学院大学、理事会及び研究発表）

△研究プロジェクトへの参加▽

東洋大学共生思想研究センター研究員（センター長：竹村牧男「東洋大学」）

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）研究員（機構長：松尾友矩「東洋大学」）

「チベット・ポタラ宮所蔵梵本『維摩経』に基づく総合的研究」（平成十九年度科学研究費「基盤研究（B）」）、研究代表者：多

田孝文「大正大学」、研究分担者

「仏教用語の『日英基準訳語集』構築に向けての総合的研究」（平成十九年度科学研究費「基盤研究（A）」）、研究代表者：斎藤明「東京大学」、研究分担者

△教育活動▽

学内担当科目

学部：仏教学概論（Ⅰ・Ⅱ部）

仏教思想論（Ⅰ部）

インド哲学仏教学演習④（Ⅰ部）

文学部総合科目Ⅰ（Ⅰ・Ⅱ部共通）

宗教をめぐる諸問題B（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）一回担当

当

「大乘仏教の戒律」（二月十日）

・校友会寄附講座（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）五回担当なら

びに全体責任者

「井上円了は何を目指し、何を実現しようとしたか——その生涯と実践」（八月五日、二限）

「井上円了が受けたカルチャーショック——円了は海外で何を見、何を考えたのか」（八月八日、三限）

「社会で活躍する校友——社会福祉」（九月二十九日、二限）

「井上円了の生涯をかけた熱き闘い——最後の著

作「奮闘哲学」(九月三十日、四限)

「講義のまとめ」(九月三十日、五限)

大学院・大乘仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ(前期課程)

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ(後期課程)

△大学・学部管理・運営活動▽

大学院文学研究科仏教学専攻主任、東洋大学大学院FD委員会

委員／東洋学研究所研究員／共生思想センター研究員／東洋

大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ

(TEPPH) 研究員

△社会的活動▽

(財) 仏教伝道協会英訳大蔵経編集委員会(委員)／同協会仏

教聖典編集委員会(委員)／(財) 全日本仏教会国際交流審

議会(委員)／(財) 東方研究会(研究員)

△特別講義・公開講座▽

「井上円了の教育理念」東洋大学文学部特別講義(新入生対象)、

於東洋大学白山校舎6号館、平成二十年四月十六日

「エコロジーと仏教」TEPPH主催・東洋大学総合科目・共通テー

マ「エコ・フィロソフィ入門」、東洋大学白山校舎、平成二十

年六月十二日

「大乘仏教概論」東京国際仏教塾特別講義、於東京大学仏教青

年学生会館、平成二十年六月十四日

「明治の仏教と仏教青年会運動」東京大学仏教青年会、於東京

大学仏教青年学生会館、平成二十年七月十一日

「仏教の経典と音楽」学びライブ・東洋大学主催、於東洋大学
白山校舎・六号館、十月五日

「現代の共生思想——椎尾辨匡から黒川紀章まで——」(公開講

座)「共生への道を求めて」第一回講義 共生思想エンター主

催、於東洋大学白山校舎、平成二十年十一月五日

「日本人は経典をどのように受け容れたのか」(東洋大学生涯学

習センター公開講座・エクステンション講座B)東洋思想へ

の誘い▽、平成二十年十一月五日、東洋大学白山キャンパス)

伊吹 敦

△論文▽

「慧可伝の再検討」(単著、「東洋学論叢」第三十三号)「東洋

大学文学部紀要」第六十一集▽、平成二十年三月三十日、一

三六頁)

「墓誌銘に見る初期の禪宗(上)」(単著、『東洋学研究』第四十

五号、平成二十年三月三十日、二八八〜三〇二頁)

△その他▽

「叢林生活の安定(上) 要説・中国禅思想史 一六」(単著、

「禅文化」二〇七、平成二十年一月二十五日、四四〜五三頁)

「叢林生活の安定(中) 要説・中国禅思想史 一七」(単著、

「禅文化」二〇八、平成二十年四月二十五日、一三四〜一四二

頁)

「叢林生活の安定(下之上) 要説・中国禅思想史 一八」(単

著、『禪文化』二〇九、平成二十年七月二十五日、五九〜六八頁)

『叢林生活の安定(下之下) 要説・中国禪思想史 一九』(單

著、『禪文化』二二〇、平成二十年十月二十五日、一三二〜一三九頁)

「禪が日本に残したもの」(單著、荻部直・片岡龍編著『日本思想史ハンドブック』、新書館、平成二十年三月五日、五八〜五九頁)

「安心」「北宗禪」「安心立命」「一相三昧」「淤泥深淺人不識」

「遠看近看」「活鱖鱖地」「棺木裏瞠眼」「凝心」「現身說法」

「虚明自照」「悟了同未悟」「守一不移」「収放如如」「守心」

「声色外威儀」「聖諦不為」「青山常運歩」「隻履達磨」「箭箭相

拄」「触処全真」「祖師心印」「達磨禪」「斷臂求法」「泥仏不渡

水」「東喝西棒」「軟語」「繞路說禪」「念不起為坐」「不識」

「不識文字」「莫忘」「楞伽宗」「靈知」「法句經」「觀心論」「伝

法玉記」「慧能」の各項目(田上太秀・石井修道編著『禪の思

想辞典』、東京書籍、平成二十年六月十日)

△学会活動▽

所屬学会ならびに役職

日本佛教学会(理事) / 東アジア仏教研究会(役員) / 日本

印度学仏教学会(会員) / 仏教思想学会(会員) / 早稲田大

学東洋哲学会(会員) / 財団法人東方学会(会員)

研究発表

「戒律」から「清規」へ―北宗の禪律一致思想とその克服としての清規の成立―日本佛教学会平成二十年度学術大会、平成二十年九月十二日、叡山学院

△教育活動▽

学内担当科目

学部・中国仏教史A・B (I・II部)

仏典の思想と文化II A (I部)

インド哲学仏教学演習⑥ (I部)

インド哲学仏教学演習⑫ (II部)

宗教をめぐる諸問題B (I・II部乗り入れ) 一回担当

当

「中国仏教における戒律と禁欲」(十月十八日)

校友会寄附講座 (I・II部乗り入れ) 一回担当

「哲学館の後継者たちの活躍―境野黄洋、高嶋

米峰など」(九月二十六日、二時限)

大学院・中国仏教研究I・仏教学研究指導IV (前期課程)

仏教学特殊研究III・仏教学研究指導IV (後期課程)

△大学・学部管理・運営活動▽

インド哲学科第II部主任 / II部主任会議委員 / 文学部内資格審

査委員会委員 / 文学部内カリキュラム委員会委員 / 東洋学研

究所研究員

△社会的活動▽

講座「禅思想の誕生 中国独自の仏教はいかにして生まれたか」

(東洋大学生涯学習センター公開講座・エクステンション講座)
座B「東洋思想への誘い」、平成二十年十月十一日、東洋大
学白山キャンパス)

財団法人東方研究会兼任研究員

山口しのぶ

△論文▽

「カトマンドゥ盆地のナーマサンギーティ文殊について」(単著、
『東洋学論叢』第三十三号、平成二十年三月、一四八—一七〇
頁)

「十二ジョーティル・リングガ寺院について——マハーラーシ
トラ州グリシュネーシュヴァル寺院を中心として——」(単著
『印度学仏教学研究』第五十七卷一号、平成二十年十二月、二
六二—二六八頁)

△その他▽

「南アジアの寺院縁起——ヒンドゥー教シヴァ・リングガ崇拜の神
話と巡礼——」(単著、『アジア遊学』第一一五号、平成二十年
十月、三二—四一頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会(会員)／日本宗教学会(会員)／南ア
ジア学会(会員)／日本佛教学会(会員)／密教図像学会
(会員)／東海印度学仏教学会(会員)／パリー学仏教文化

学会(会員)
研究発表

「南アジアの寺院縁起——ヒンドゥー教シヴァ・リングガ崇拜の
神話と巡礼——」(シンポジウム縁起の東西——聖人・奇跡・巡
礼、平成二十年三月十九日、早稲田大学高等研究所)

「十二ジョーティル・リングガ寺院について」(日本印度学仏教
学会第五十九回学術大会、平成二十年九月四日、愛知学院
大学)

△研究プロジェクトへの参加▽

「マハーラーシユトラ州におけるヒンドゥー教巡礼地の研究」
(平成二十年度科学研究費〔基盤研究(C)〕研究代表者)
△教育活動▽

学内担当科目

学部・インド哲学仏教学演習⑧(Ⅰ部)

インド・仏教図像学(Ⅰ・Ⅱ部)

チベット文献講読A・B(Ⅱ部)

インド学仏教学への誘いA(Ⅱ部)・B(Ⅰ部)

宗教学ⅡA・B(Ⅱ部)

宗教をめぐる諸問題A・B(Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ)二

回担当

「チベット仏教の信仰と修行」(五月二十四日)

「ネパール仏教における戒律と禁欲」(十一月十五日)

大学院・大乗仏教研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ(前期課程)

△大学・学部管理・運営活動▽

外国語委員会委員／文学部自己点検・評価委員会委員／東洋学研究所研究員・運営委員

△社会的活動▽

講座「心・身体・世界―チベット密教の修行体系」(東洋大学生涯学習センター公開講座・エクステンション学習講座Bへ
東洋思想への誘い3)、平成二十年十一月十五日、東洋大学
白山キャンパス)

沼田一郎

△書評▽

“Patrick Olivelle, *Dharmasūtra Parallels: Containing the Dharmasūtras of Āpastamba, Gautama, Baudhāyana and Vasīṣṭha*. Delhi: Motilal Banarsidass, 2005.IX+230Pp. Rs. 685.”(单著) *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Samphāsā*, 27.名古屋大学大学院文学研究科インド文化学研究室、平成二十年九月三十一日、一八二―一八三頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職
日本南アジア学会(会員・英文叢書委員会委員)／日本印度学仏教学会(会員)／日本佛教学会(会員)／北海道印度哲学仏教学会(会員・評議員)

研究発表

「ヴィシヌヌスメリテイの文献史的位置づけについて」(北海道印度哲学仏教学会学術大会、平成二十年八月三十日、北海道学園大学)

△研究プロジェクトへの参加▽

「東洋における聖地信仰の研究…ヒンドゥー教と仏教における聖地巡礼成立の要件」(平成二十年度東洋学研究所プロジェクト、研究代表者…宮本久義「東洋大学」、研究分担者)

△教育活動▽

学内担当科目

学部・サンスクリット文献を読むA・B(Ⅰ部)

インド文化論ⅠA・B(Ⅱ部)

インド哲学仏教学演習(Ⅰ部)

インド哲学仏教学演習(Ⅱ部)

インド古典哲学(Ⅱ部)

宗教をめぐる諸問題B(Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ)一回担当

当

「ヒンドゥー教における戒律と禁欲」(十二月六日)

学外担当科目

高千穂大学非常勤講師(学部、「宗教学A・B」)

△大学・学部管理・運営活動▽

東洋学研究所研究員・運営委員／東洋学研究所『東洋学研究』編集委員／文学部予算委員会委員／

△社会的活動▽

講座「法事・法話・法律―『法』のインド的起源」(東洋大学
生涯学習センター公開講座・エクステンション学習講座Bハ
東洋思想への誘い▽、平成二十年五月三十一日、東洋大学白山
キャンパス)

岩井昌悟

△論文▽

「『あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げ
るように』―神變のイメージの変遷を追う」(単著、「東洋学
論叢」第三十三号△「東洋大学文学部紀要」第六十一集▽、平
成二十年三月三十日、六八―一三二頁)

「パトリ十六慧と北傳「『慧者』リストの對應關係」(単著、
『日本佛教学會年報』第七十三號、平成二十年七月十日、後七
十一―九十四頁)

「初期仏教における肉食の肯定」(単著、『동지문회』, 아열개 불
것인가?』、平成二十年十一月二十九日、五―五七頁、韓国語
訳「조기불교에 있어서의 육식의 긍정」は仏教文化研究院研究
教授・鄭榮植氏による。『佛教學報』第五十輯、二〇〇八年十
二月三十一日、五一―七六頁に再掲)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会(会員) / 日本宗教学会(会員) / 日本

佛教学会(会員) / 仏教思想学会(会員)
研究発表

「大唐西域記に記される仏跡と原始仏教聖典の關係―マトウ
ラーのケース」(東洋大学東洋学研究所研究発表例会、平成
二十年一月十二日)

「ムンゲール調査報告」(東洋大学東洋学研究所研究発表例会、
平成二十年十月十一日)

「初期仏教における肉食の肯定」(十一月二十九日に韓国・東
国大学校法科大学謀議法廷室にて開催された国際学術大会
「동지문회』, 아열개 불
것인가?」において発表。通訳は
仏教文化研究院研究教授・鄭榮植氏)

△調査活動▽

「東洋における聖地信仰の研究…ヒンドゥー教と仏教における
聖地巡礼成立の要件」における仏蹟(ブツガヤル、サール
ナート、ムンゲール)調査(平成二十年東洋学研究所プロ
ジェクト「東洋における聖地信仰の研究…ヒンドゥー教と仏
教における聖地巡礼成立の要件」、研究代表者…宮本久義「東
洋大学」、研究分担者、平成二十年八月二十三日―八月三十一
日)

△研究プロジェクトへの参加▽

「東洋における聖地信仰の研究…ヒンドゥー教と仏教における
聖地巡礼成立の要件」(平成二十年東洋学研究所プロジェクト
ト、研究代表者…宮本久義「東洋大学」、研究分担者)

△教育活動▽

学内担当科目

学部・インド哲学仏教学演習（Ⅰ部）

インド仏教史A・B（Ⅰ・Ⅱ部）

パリー文献講読（Ⅰ部）

仏教古典哲学（Ⅱ部）

インド哲学仏教学演習（Ⅱ部）

宗教をめぐる諸問題B（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）一回担当

「初期仏教における信仰と修行」（四月二十六日）

△大学・学部管理・運営活動▽

入試委員会委員／情報機器運営委員会委員／東洋学研究所研究員

△社会的活動▽

講座「釈尊の侍者比丘たち——その人間像」（東洋大学生涯学習センター公開講座・エクステンション学習講座B）東洋思想への誘い3▽、平成二十年十月二十五日、東洋大学白山キャンパス）

平成二十年度演習ゼミ活動報告

沼田一郎

インド哲学仏教学演習①

①テーマ「古代インド社会・文化の諸問題」

②メンバー 幹事・高橋洋平（三年生）、（幹事を除く）四年生一
三名、三年生一五名、二年生一〇名

③活動報告

今年度は英語論文の輪読に挑戦した。数年前にA.L.Bashamの『The Wonder that was India（和訳）の輪読をやったことがあるの』今回はBasham編の『A Cultural History of India』から二編を読んだ。参加者の希望を聞いて選んだのだが、英文の読解にエネルギーをとられて、内容を十分理解することは困難であった。一人が論文一点を丸ごと担当するという方法も考えられたが、ゼミの人数が多すぎて断念せざるを得なかった。

このほかには研究発表と卒論指導がゼミ活動の柱である。前者については、三年生の段階から卒論を視野に入れた内容を要求するべきであると感じた次第である。後者の卒業論文については、できるだけ早い時期にテーマを発見すること、そしてそれについて教員との討論を通して深く掘り下げることを要求した。論文の形式や内容・構成にわたって意見を交換できたケースではよいものが生まれたと自負している。勸学奨学金受賞者が出たことも付

記する。

ゼミ合宿は夏に白馬ゼミナーハウスで実施した。個別の研究発表が中心であったが、一つの課題について共同研究するような内容も模索したい。

宮本久義

インド哲学仏教学演習②

①テーマ「インド思想研究」

②メンバー（春学期）幹事・南浩一（幹事）、初山擁也（副幹事）、（幹事を除く）四年生七名、三年生一二名、二年生二二名、（秋学期）幹事・初山擁也（幹事）、塩澤花野（副幹事）、（幹事を除く）四年生八名、三年生一名（イギリス留学のため休学中の一名を除く）、二年生一名

③活動報告

本年度は各班が年間を通して研究するテーマを決め、それに関連するサンスクリット原典あるいは外国語文献の一部を読解することを課題とした。哲学班はヴェーダーンタ哲学研究に取り組み、シャンカラをはじめ、ラーマーヌジャ、マドヴァ、ニンバルカの思想研究、およびラマナ・マハルシやヴィヴェーカーナンダとの比較を行った。テクストは『マイトリ・ウパニシャッド』を取り上げたが、かなり難読したようだった。神話班はインドの女神神話をテーマとし、メソポタミア、ギリシア、エジプト、北欧神話と比較し、インド神話の特徴を探った。テクストは『ラーマー

ヤナ」のスイーター誘拐の場面を読解した。文化班は、インドの民俗絵画である「ミティラー画」を取り上げ、Yves Véquaud、*The Art of Mithila*、1977の絵画解説部分を全訳した。文学班はインドの説話文学をテーマとし、『ヒトパーデーシャ』の一部を翻訳した。今年度は四年生の卒業論文中間発表とともに、三年生、二年生にも各自の卒業論文（制作）に向けての中間構想を発表してもらうことにした。皆、興味のもてる研究対象を必死に見つけようとする過程で、多くのテキストや参考文献に当たり、教員の期待に応えてくれた。

夏期の研修合宿は八月三十一日から九月二日まで、富士見高原セミナーハウスで行った。二日目の午後は信州原村・八ヶ岳自然文化園に行き、ゼミ生間の親睦を深めることができた。終了時には参加者全員の発表配布資料が二センチほどの厚さになり、質量ともに充実した成果が得られた。また、十一月九日（日）には、学外研修として「ミティラー画とワルリー画」（関口美術館）と「スリランカ展」（東京国立博物館）へ行き、ミティラー画の画家と交流を深めるなど有益な機会を持つことができた。

橋本 泰元

インド哲学仏教学演習③

① テーマ「ヒンドゥー教思想研究」

② メンバー ゼミ長・長谷川裕太（三年生）、（ゼミ長を除く）他
四年生一五名、三年生五名、二年生一〇名、大学院前期課程院

生一名

③ 活動報告

昨年度に引き続き、初めの数回で本ゼミの授業の主旨、資料概説、卒業論文を視野に入れた論文執筆方法などを講義した。そのなかで、大勢のゼミ生を、それぞれの関心に従って大きく思想班（ヒンドゥー教思想）、神話班、儀礼班（ヒンドゥー教民間儀礼）、文化班（ヒンドゥー教女神信仰）の四班に分けた。

これらの班は昨年度をほぼ継承しているので、各班における発表とレジュメの作成などの提示方法も徐々によくなってきたと思う。しかし、昨年度の反省点と同じであるが、参考資料のほとんどが邦文文献であり、ヒンドゥー教に関わる原典を読み資料を批判的に読むという訓練になかなか取り組めなかった。ただ、英文資料に取り組む個人研究をするゼミ生が少し増えてきたことは喜ばしい。

この自主的研究発表と平行して、四年生の卒業論文あるいは卒業制作の中間発表も行った。四年生の半分は夏期研修合宿にて行った。今年度も、参加者数が多かったせいもか大学セミナーハウスに予約できず、今年度は千葉・九十九里浜にある民間会社運営の貸別荘「イルカハウス」にて九月八～十日、食事を自炊し、いわば缶詰状態で、充実した夏期研修を行えた。

渡辺章悟

インド哲学仏教教学演習④

① テーマ「大乘仏教の研究」

② メンバー 幹事…八木田香織(四年生)、山本耕平(三年生)

(幹事を除く) 三年生二名、二年生八名

③ 活動報告

本ゼミは大乘仏教の研究をテーマとし、学生の意欲的な研究活動を促進するため、毎回特定のテーマを決めて研究発表を行う方法をとっている。

本年も最初に担当者が運営方針やら大乘仏教の概要を説明し、その後にはすでに経験のある四年生と三年生から実際に個人研究を中心とした研究発表を行った。今年のゼミは構成人数も少なく、大半が二年生であったため、彼らの間でのみまわりは良かったようだった。前期は比較的出席率も良く、発表もうまく纏まっていたものが多かったが、後期になると残念ながら、急に出席率が悪くなった。特に遅刻が多くなり、自分の発表すべき日でありながら無断で欠席したりする無責任なゼミ生も見られた。特に問題は学習意欲の低下である。日常生活の中で学習する習慣がなく、授業の目的ははっきり持てないような学生も少なからずいて対応に苦慮した。

夏合宿は仏教青年会と合同で、禪寺にて合宿をおこなった。ゼミの参加者は約半数ほどであったが、参加した学生は坐禅を体験したり、レクリエーションに興じたり、壇輪で有名な相川考古館

を参観し、お茶室にて抹茶をご馳走になった。また、徳川発祥の地である世良田の東照宮、長楽寺などを拝観し、盛りだくさんの旅を体験できたことに、大いに満足していたようであった。

今年は研究発表がうまく行かなかったこともあり、途中でゼミ生の意見を聞いてサンスクリット原文で『般若心経』を読み始めたが、サンスクリットに慣れていない学生が多く、さらに予習すらせずに出席してくるものがほとんどで、これもうまくいかなかった。結局は再び研究発表の形式に戻したが、最後になって出欠を何度も厳しく忠告するようになって、ようやく授業参加の意識が多少改善されたようであった。

今年のゼミの反省を来年に活かして、来年はもう少し実りあるゼミ活動にしたいと切に願っている。

岩井昌悟

インド哲学仏教教学演習⑤

① テーマ「原始仏教研究」

② メンバー (春学期) 幹事…中島寿丸(四年生)、(幹事を除く)

四年生二名、三年生四名、二年生四名、(秋学期) 幹事…小倉

麻由(三年生)、(幹事を除く) 四年生三名、三年生三名、二年

生四名

③ 活動報告

今年度も昨年度を踏襲し、最初に指導教員が原始仏教聖典について概説し、その後は、卒業論文・卒業制作を視野に入れた「個

人研究」と、ゼミ生全員による「共同研究」の二本立てとし、個人研究の報告が一巡したら、共同研究の発表に移り、それが終わるとまた個人研究に戻るといふ形で、両研究を交互に進めた。なお「共同研究」とはいつても各人が主体的に同一テーマにとりくむ形であり、グループ別の研究ではない。また適宜、共同研究に関わるテーマで、指導教員による講義をはさんだ。

今年度に設けた共同研究テーマは「仏教にける善人とは？」というものであった。この問題を明らかにすべく、各ゼミ生が分担（南伝大藏経で一人3〜4冊）してパーリ聖典を翻訳によって読み進め、毎回読んだ箇所から共同研究テーマに関連するなんらかの発表を行った。残念ながら本年度には共同研究テーマに関して明確な結論は得られなかったものの、翻訳を通してでも、とにかく聖典に直接触れてもらいたいという意図が指導教員側にあり、その点は達成できたであろう。

課外活動は四月二十二日にコンパを、九月十八日〜二十日には鴨川セミナーハウスにて夏合宿を行った。合宿は四年生の卒論中間報告が中心であったが、三、二年生にも個人研究の発表をしてもらった。

四年生三人が卒業論文を提出した。中島寿丸君の「神々のマニユアル―梵天勧請から見る釈尊の布教の意味」が田村芳朗賞を受賞した。

伊吹 敦

インド哲学仏教演習⑥

① テーマ「禅思想研究」

② メンバー 幹事…相川裕保（四年生）、（幹事を除く）四年生三名、三年生三名、二年生四名

③ 活動報告

本年度は、前期は「十牛図」、後期は「正法眼藏随聞記」をそれぞれ輪読した。いずれも、テキストを適当に区切り、担当者を決めて、各自作成したレジュメに基づいて発表してもらった。

禅文献には難しいものが多く、毎年、学生たちが理解に苦しんでいるのを痛感していたので、今年ではできるだけ易しく、具体性をもったものをテキストにしようと考え、「十牛図」と「正法眼藏随聞記」を選んだが、その点では成果はあったと思う。

ただ、学生の取り組みは必ずしも充分ではなく、解説本をそのままコピーしたようなレジュメがしばしば見られた。演習では、自分で読み、考える力を養うべきなのだが、なかなか改善が見られなかったことは残念である。

卒論指導は随時行ったが、学生によって取り組みに大きな違いがあり、できあがった卒論も、何年もかけて仕上げた立派なものから、甚だしく粗忽なものまで様々であった。卒論指導をもっと組織的・計画的なものとして、一定の水準に保つ必要性を痛感した。

課外活動としては、コンパを何度か行った外、学生の希望に沿っ

て、夏季休暇中に上野界隈を散策する集いをもった。東京国立博物館が主な訪問先のはずだったが、ちょうど休館日で、計画性のない自分たちの行動にあきれ果てた。だが、それもいい思い出か。

竹村牧男

インド哲学仏教学演習⑦

- ①テーマ「鎌倉新仏教の祖師方の人と思想」
- ②メンバー 幹事・窪明博（四年生）、副幹事・田中雄一郎（三年生）、（幹事を除く）四年生九名、三年生五名、二年生六名
- ③活動報告

本年度は、「鎌倉新仏教の祖師方の人と思想」をテーマにゼミを行った。ただし四年生は、卒論研究を優先し、卒論のテーマで発表してもらった。四年生の卒論構想発表を最初の頃に設定したが、中には十分に構想が確定していない者もいて、実質的な意味を持ち得ない場合もあったことは残念であった。三年生・二年生は、テーマに沿っての発表であり、人数が少なくなっただけであって、発表回数は夏季のゼミ合宿を含め、3回できたのではないかと思う。三年生は昨年度の経験もあり、発表に慣れていたはずであるが、担当時間を消化すればよいという姿勢も見え、自ら可能なかぎり調査を深め問題を考察する意欲が見られなかったことは残念であった。二年生は、まだ取組み方がわからない感じであったが、今後、先輩をも超えていく覇気を見せてほしいものである。鎌倉新仏教というテーマで、やはり親鸞をとりあげる発表

が多かった。その他、道元、日蓮らを取り上げられた。

年間の行事として、四月には歓迎コンパを行い、夏休みには鴨川のセミナーハウスでゼミ合宿を行なった。ただし、参加者が減少しており、これも残念なことである。十二月、忘年会を行い、三月には追い出しコンパを予定している。八月三十一日～九月二日の二泊三日のゼミ合宿では研究発表も二日にわたって行うとともに、鴨川シーワールドに遊び、夕食後の懇談会でも大いに懇親を深めた。

山口しのぶ

インド哲学仏教学演習⑧

- ①テーマ「インド・チベット密教の研究」
- ②メンバー 幹事・藤浪 崇裕（三年生）、（幹事を除く）四年生六名、三年生九名、二年生一二名
- ③活動報告

本年度春学期はサンスクリットの文献講読、秋学期は個人発表を中心にゼミを進めた。春学期においては、十一世紀頃の編纂とされるインド密教のマンガラテキスト『三シユパンナ・ヨーガーヴァリー』（完成せるヨーガの環）『第二十一章 法界語自在マンガラの章』を講読した。本演習においては各自予習をし、授業中に和訳、問題点などを質疑応答するという形式をとった。またその際『国立民族学博物館研究報告別冊七号 法界語自在マンガラ

の神々」(長野泰彦、立川武蔵編、一九八九)中のテキストと和訳(森雅秀氏訳)、および現代のネパール人画家による図版を参照しながら講読を進めた。

本ゼミにおいては、今年度が初めてのサンスクリット・テキスト講読であったので、特に二、三年生はデーヴァナーガリー文字のローマナイズ、和訳等に苦労したようだが、次第に慣れた様子であった。半年間の講読を通じて、密教図像に関するサンスクリットの専門用語の習得、図像の具体的イメージの把握、サンスクリット文法の確認等がある程度できたのではないかと考えている。

秋学期は、各自で興味のあるテーマを決定し口頭発表を行った。本ゼミはとくに仏教図像、美術に興味のある学生が多く、仏像やマンダラ、仏塔、またチベット仏教に関する発表もあった。また平成二十年九月七日から九日まで河口湖で合宿を行い、四年生の卒論中間報告、付近施設の散策などを行った。合宿時点で、まだ卒業研究の準備が遅れている四年生もあったので、今後は早めにテーマ決定、準備等を行っていくよう指導していきたい。

出野尚紀

インド哲学仏教学演習⑨(Ⅱ部・二年生)

- ① テーマ「インド思想・文化の研究」
- ② メンバー 幹事・猪狩美穂(二年生)、以下二二名
- ③ 活動報告

テーマを「インド思想・文化の研究」と設定したが、各人の興

味の赴くところに従い「インド哲学科の授業である」という範疇の中で自由に問題設定をし、研究発表を一年に二度ずつ行うこととした。また、各回の発表者以外が、「教室に存在するだけ」とならないように、各研究発表に対して、出席者は質問・コメントを述べ、それを記入者が記入し、次の回に発表者が回答をするという形式を採った。以下に修得者の発表題目を列挙する。

猪狩美穂「インドの食文化」インド人はどういふものを食するのか?、「イランの食文化」。石原優美「古代インドの神について」シヴァ神とその家族、「インドの葬儀」諸国との比較」。川村友里「インドの服飾について」婚礼衣装とはどのようなものか、「中国少数民族の服飾」。齊坂将吏「インドのIT」IT技術者を育てる教育、「インドの結婚」タウリー制度。末廣龍一「インドの宗教ナシヨナリズムについて」インドのヒンドゥーとムスリム、「阿修羅」そのキャラクターの謎。宅間房恵「仏像」ガンダーラの弥勒菩薩像、「マトゥラー仏について」。中野光「ヒンドゥー教の神々」神々信仰の起源とその形態、「密教とは」ヒンドゥータントリズムとその思想。橋本美里「ヒンドゥー教について」カースト制度の起源と形態、現況、「インドの音楽」。

反省点を述べればキリがないが、担当教員が、この設定で演習を担当し指導するには、学問的にも人間的にも、余りに力不足な面が顕著であり、受講生には多大な迷惑をかけたことをまず羞じねばならないと思う。とくに「印度学とか離れたことでも自由

に」としたが、それによって授業として発表に対しての解説・説明が不十分となり申し訳なく思う。

岩井昌悟

インド哲学仏教学演習⑩（Ⅱ部・二年生）

①テーマ「仏教学分野」

②メンバー 幹事・山崎可菜絵（二年生）、（幹事を除く）二年生

十三名、三年生五名、四年生三名

③活動報告

当初の計画では、春学期は全体で一つの共通のテーマをグループに分かれて研究して発表する形式を、秋学期は自由テーマで個人研究発表を行う形式で進めていくつもりであった。グループ研究ではゼミ生の要望を考慮して初期仏教班、大乘仏教班、日本仏教班に分け、「仏教各派の釈尊観」という全体テーマを設定し、準備してもらった。しかしながらいざ発表となった時に、ゼミの時間以外にゼミ生が班で集まるのが困難であって、結局各人が独自に準備してきたことが判明したため、共通テーマの個人研究発表に切り替えざるを得なかった。秋学期は予定通り、自由テーマによる個人研究発表で進めることができた。全員が春学期と秋学期にそれぞれ一回ずつ発表を行った。

一年を通してレジュメの作成方法の指導が主であり、内容的なことにはほとんど踏み込むことができなかった。改善すべき問題点としては、ゼミ生が自ら選ぶ参考資料の質が悪く、良書を参照

する学生が少ないこと、また剽窃にならないよう、典拠をきちんと挙げ、参考資料を複数用いることを義務付けると、発表が単なる複数の資料のパッチワークになってしまい、独自の文脈をつくることができないことなどが挙げられる。

参考資料の質の改善については、たといゼミ生の力量を上回っても、担当教員の側で参考資料を限定する必要性を感じた。

課外活動としてはコンパの話が上がっていたが、結局実現に至らなかった。

沼田一郎

インド哲学仏教学演習⑪（Ⅱ部・三、四年生）

①テーマ「インド思想研究」

②メンバー 幹事 田中節子（三年生）、（幹事を除く）四年生六

名、三年生五名

③活動報告

今年度から二年間担当することになった。選択科目であることが理由かもしれないが、きわめて少人数で参加者の意識も高く、「ゼミ」としてはあるべき姿であると言える。全員に共通する課題としては、古ウバニシャッドの輪読を行い、その他には個別の研究発表を実施した。前者に関しては、インド思想上の主要なトピックを扱った箇所を選んだが、サンスクリットの読解力に差があり、全員が同じレベルで参加したわけではない。しかし、一文ごとに詳細な説明と質疑応答があったので、得られたものは大

きいと思う。

研究発表については、三年生の段階から卒論を視野に入れた勉強をしている参加者も多く、成果が期待される。ゼミ合宿は夏に富士見高原セミナーハウスで実施した。

伊吹敦

インド哲学仏教学演習⑫（Ⅱ部・三〜四年生）

①テーマ「禅思想研究」

②メンバー 幹事・大滝彩加（三年生）、（幹事を除く）四年生二名、三年生七名

③活動報告

本年度は、最初に、鈴木大拙の「禅仏教」という文章を読んで、禅思想について基本的な知識を学んだ後に、道元の『正法眼蔵』を読み始めた。しかし、あまりに内容が難しすぎ、授業にならなかった。そこで、途中から、テキストを『正法眼蔵随聞記』に改めた。

授業は輪読の形、即ち、テキストを適当に区切り、担当者を決めて、各自作成したレジュメに基づいて発表をしてもらった。初めは馴れず、うまく行かなかったが、時間が経つにつれてすっかりとした発表になっていった。また、自発的な質問が出る場合などもあり、取り組む姿勢においては、一部の学生よりも遥かにまざっていると感じた。

授業を通じて、『正法眼蔵随聞記』は、平易な内容でありなが

ら、その奥に深い思想性が垣間見られ、学生に禅的価値観を知ってもらうには最適の文献であることが分かったので、来年度もテキストに使うかと思った。

卒論指導は随時行つたが、学生によって取り組みに大きな違いがあり、できあがった卒論も、何年もかけて仕上げた立派なものから、甚だしく粗忽なものまで様々であった。卒論指導をもっと組織的・計画的なものとして、一定の水準に保つ必要性を痛感した。

課外活動としては、コンパを行つた程度であった。合宿などでもできればよかったが、諸般の事情のため果たせなかったのは遺憾である。

平成二十年度開講科目

・授業名、サプタイトル、担当者の順に記す。

・平成二十年度以降の新カリキュラムと平成十九年度以前の旧カリキュラムの間で、授業の名称に変更があったものについては、新カリキュラムの名称を掲載した。

・通年科目はA（春学期）・B（秋学期）に分かれるが、担当者が同一であり、かつ、サプタイトルが春秋通じて同一の場合、その区分は省略して記した。

・ただし、半期のみでの授業については《春》《秋》と表記した。
 ・担当者および《春》《秋》の授業区分に付したカッコ内の数字は、それぞれⅠ部・Ⅱ部の区別を示す。カッコが付されていないものは、Ⅰ部Ⅱ部隔年開講の科目か、Ⅰ部・Ⅱ部の担当者が同一であることを示す。

△学部Ⅴ（五十音順）

イスラム教概説《秋》（イスラームのとらえ方）

後藤 明

インド学仏教学への誘いA（インド思想・宗教・文化をどのように学ぶか）

宮本久義（Ⅰ）

インド学仏教学への誘いB（仏教研究入門）

山口しのぶ（Ⅰ）

インド学仏教学への誘いA（仏教研究入門）

山口しのぶ（Ⅱ）

インド学仏教学への誘いB（インド学分野）

橋本泰元（Ⅱ）

インド現代思想（インド近・現代の宗教思想家）

宮本久義

インド古典哲学（インド思想史）

宮本久義（Ⅰ）

インド古典哲学《秋》（インド古典哲学概説）

沼田一郎（Ⅱ）

インド哲学仏教学演習①（古代インド社会・文化の諸問題）

沼田一郎（Ⅰ）

インド哲学仏教学演習②（インド思想研究）

宮本久義（Ⅰ）

インド哲学仏教学演習③（中世ヒンドゥー教思想研究）

橋本泰元（Ⅰ）

インド哲学仏教学演習④（インド大乘仏教の研究）

渡辺章悟（Ⅰ）

インド哲学仏教学演習⑤（原始仏教研究）

岩井昌悟（Ⅰ）

インド哲学仏教学演習⑥（禅思想研究）

伊吹 敦（Ⅰ）

インド哲学仏教学演習⑦（日本仏教の自然観）

竹村牧男（Ⅰ）

インド哲学仏教学演習⑧（密教研究およびインド・仏教美術の研究）

山口しのぶ（Ⅰ）

インド哲学仏教学演習⑨（インド思想・文化の研究）

出野尚紀（Ⅱ）

インド哲学仏教学演習⑩（仏教学分野）

岩井昌悟（Ⅱ）

インド哲学仏教学演習⑪（インド思想研究）

沼田一郎（Ⅱ）

インド哲学仏教学演習⑫（禅思想研究）

伊吹 敦（Ⅱ）

インドの宗教A（ヴェーダの宗教と反ヴェーダ的自由思想）

橋本泰元

インドの宗教B（反ヴェーダ的自由思想とヒンドゥー教諸思想の

展開

インド仏教史A (釈尊の覚りとその展開)

橋本泰元

インド仏教史B (大乘仏教とは何か)

岩井昌悟

インド・仏教図像学《春》(Ⅱ)・《秋》(Ⅰ) (仏、神々の姿とその意味)

岩井昌悟

インド文学《春》(Ⅰ)・《秋》(Ⅱ) (ヴァインディアヤ山脈の頂きからインド文学を見る)

山口しのぶ

インド文化論IA (ウパニシャッド研究)

高橋孝信

インド文化論IB (碑文研究)

沼田一郎

インド文化論II (道をめぐるインドの歴史と文化)

沼田一郎

キリスト教概説《春》(キリスト教の誕生とその背景)

宮本久義

サンスクリットを読む (古典サンスクリット初級文法)

山中利美

渡邊郁子(Ⅱ)

サンスクリットを読むⅠ・Ⅱ (古典サンスクリット入門)

渡邊郁子(Ⅱ)

社会と宗教A (近現代の日本社会と宗教)

沼田一郎(Ⅰ)

社会と宗教B (現代社会と宗教)

住家正芳

宗教科教育論《春》(宗教と教育について)

住家正芳

宗教科指導法Ⅰ・Ⅱ (「宗教科」の教育と指導)

成瀬良徳(Ⅰ)

宗教学ⅡA (アジア宗教の歴史と特色)

成瀬良徳(Ⅰ)

宗教学ⅡB (宗教の諸概念とアジア宗教の理解)

成瀬良徳(Ⅰ)

山口しのぶ(Ⅱ)

山口しのぶ(Ⅱ)

山口しのぶ(Ⅱ)

山口しのぶ(Ⅱ)

宗教とは何か

渡辺浩希

宗教をめぐる諸問題A (仏教を中心として、「信仰と修行」について考察する) (Aオムニバス形式)

宮本久義

宗教をめぐる諸問題B (仏教を中心として、「戒律と禁欲」について考察する) (Aオムニバス形式)

宮本久義

卒業論文・製作

卒業論文・製作

チベット文献講読 (古典チベット語の文法および仏教経典の翻訳練習)

山口しのぶ

中国仏教史 (中国仏教の変遷)

伊吹 敦

朝鮮仏教史《春》(Ⅰ)・《秋》(Ⅱ) (朝鮮韓国仏教に対する理解を深める)

伊吹 敦

哲学概論 (知は何を目指したのか—西洋哲学と仏教—)

佐藤 厚

渡邊郁子(Ⅱ)

東南アジア仏教史《春》(Ⅱ)・《秋》(Ⅰ) (東南アジア諸国における各王朝による仏教政策の歴史を概観する)

渡邊郁子(Ⅱ)

東洋思想A (東洋の倫理思想—チベットの倫理思想を中心として—)

藪内聡子

東洋思想B (東洋の倫理思想—神秘主義(タントリズム)を中心として—)

藪内聡子

東洋思想A (東洋の倫理思想—チベットの倫理思想を中心として—)

高田茂樹(Ⅱ)

東洋思想B (東洋の倫理思想—神秘主義(タントリズム)を中心として—)

高田茂樹(Ⅱ)

日本思想《秋》(神仏習合思想の形成と展開)

島田茂樹(Ⅱ)

日本思想A (日本仏教思想の歩み)

伊藤 聡

日本思想B (日本仏教思想の歩み)

伊藤 聡

日本仏教史A (日本仏教の歩み・近世から近代)

佐藤 厚(Ⅰ)

日本仏教史B (日本仏教各宗の思想を探る)

佐藤 厚(Ⅰ)

日本仏教史 (日本仏教各宗の思想を探る)

竹村牧男(Ⅱ)

パーリ文献講読A (パーリ語文法講読)

岩井昌悟

パリー文献講読 B (聖典を直に読む)

ヒンディー文献講読 (ヒンディー語を学んでインド世界へ)

岩井昌悟

仏教文献を読む

仏教文献を読む (宗密『原人論』の講読) 佐藤 厚 (II)

仏教古典哲学 (仏教の基礎的な用語とその背景を学ぶ) 米澤嘉康 (I)

仏教古典哲学《春》(すべては解脱のために) 岩井昌悟 (II)

仏教思想論 I (般若中観思想の研究) 渡辺章悟

仏教思想論 II (唯識思想) 橋川智昭

仏教梵語講読 計良隆世

ブッダの思想とその展開 A (仏教とは何か) 渡辺章悟

ブッダの思想とその展開 B (仏教の思想とその展開) 渡辺章悟

仏典の思想と文化 I A (華嚴経の思想と文化) 金本拓士

仏典の思想と文化 I B (密教の思想と文化) 金本拓士

仏典の思想と文化 II A (禅思想の形成と社会との交渉) 伊吹 敦

仏典の思想と文化 II B (『歎異抄』を読む) 本多静芳

ヨーガとその思想 (ヨーガの実践を交えて) 番場裕之

ハ大学院 V

博士前期課程

インド哲学研究 II・インド哲学研究指導 III (中世インド思想の研究) 橋本泰元

インド哲学研究 III (祭式・儀礼から見たインドの文化の変容)

サンスクリット文献研究 I・インド哲学研究指導 I (インド哲学大系の研究) 永ノ尾信悟

初期仏教研究 I (仏教学の常識の再検証) 宮本久義

初期仏教研究 II (アビダルマ教理研究) 森 章司

大乘仏教研究 I・仏教学研究指導 I (初期大乘仏教の研究) 三友健容

大乘仏教研究 II・仏教学研究指導 II (インド・チベット密教研究) 渡辺章悟

大乘仏教研究 III (中観思想史研究―『中論』とその思想的影響をめぐって) 山口しのぶ

中国仏教研究 I・仏教学研究指導 IV (中国仏教思想研究) 齋藤 明

日本仏教研究 I・仏教学研究指導 III (空海『弁顕密二教論』講読) 伊吹 敦

日本仏教研究 II (日本密教の基盤―『大日経』の註釈を読む) 竹村牧男

博士後期課程 大久保良俊

インド哲学特殊研究 I・インド哲学研究指導 I (正統バラモン系統の思想研究) 宮本久義

インド哲学特殊研究 II・インド哲学研究指導 II (中世インド思想の研究) 橋本泰元

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（初期大乘仏教の文献的研究）
渡辺章悟

仏教学特殊研究Ⅲ・仏教学研究指導Ⅳ（中唐期の研究）

伊吹 敦

仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ（日本唯識思想研究）

竹村牧男

平成十九年度卒業論文

ハI部V

- 石井 佳太 日本ミイラ信仰の研究
 深井 友香 『声字実相義』における言語観、実相観について
 大井正太郎 諸行無常を生きながら
 平川 敬太 日印共闘の歴史
 石坂 歩美 インド文学における動物の性格
 中島 寿丸 神々のマニユアル ―梵天勧請から見る釈尊の布教の意味―
 鴨田 崇文 日本人のガンガ―観 ―三島由紀夫からプロクまで
 村井 佑輔 稲荷信仰の研究 ―狐とターキニーを中心として―
 辻 正克 パールヴァティーの諸相として派生する女神について
 田口 恵理 田口 恵理 インドの急成長を支える原動力として教育に求める事 ―教員養成問題から―
 中里 弥生 『古代インドにおける遊女の考察』 ―『カーマ・ストトラ』・『遊女の手引き』・『遊女の足蹴』を読んで―
 金高 裕美 インドの女性運動とその成果 ―Self Employed

Women's Association の活動をめぐって―

- 三戸 陽子 インドビル事情
 山中 一歩 親鸞の念仏思想
 高野 靖子 ミティラー画がもたらす生活変化と流通
 中込 美和 『秘蔵宝鑑』が説く密教 ―九顕十密―
 奥山 貴嗣 北伝に観る北伝仏教と南伝仏教の相違点 ―降魔の章を主格に―
 羽田 拓也 御釈迦様の生涯
 大森 智 現代インドにおけるスポーツ
 佐藤 美穂 九曜の研究
 町田 知里 古代インドの王権と祭祀
 宮本 百恵 墓廟を中心に見るムガル美術 ―タージ・マハルまで―
 大谷 隆憲 インドにおけるガネーシャと日本の歓喜天
 小澤美樹子 インドにおける日本語教育
 米良 友紀 インド音楽概説
 庄司 彩美 アーユルヴェーダの小児科について
 若林 大介 ウパニシャッドを中心とした死生観の考察
 菅原 ふみ 神話の構造比較研究 ―デユメジルの三機能体系説の検討―
 相川 裕保 五色不動の由来
 鳥崎 慶子 インドにおける創造神話の考察 ―ヴィシヌ神との関係を中心に―

八木田香織

インド大乘仏教における八慈悲ノ強調の背景について——チャンドラキールティ『プラサンナパター』

第十七章「業と果報とを考察すること」を中心に——

園田沙弥佳

観音信仰の成立と発展に関する研究

阿部 信哲

神と人をつなぐもの——信仰と幻覚誘発剤——

松井 縁

廓庵禪師『十牛図』における思想——自覚の深化とそのプロセス——

橋ヶ谷伊平

お寺とご住職と私

吉田 祐加

インドの食文化とスパイスの効果

峰岸 恵

タゴール著『人間の宗教』『サーダナ』における古

ウパニシャッド思想の意義

齋藤 清成

ゴータマ・ブツダの生涯

東間 友宏

インド古典文学及び説話における酒の文化

橋本 英典

不動明王の研究

森村 政道

南伝大藏経に見るバリッタの研究

村上 貴大

インド映画におけるナシヨナリズムとグローバリズ

ム——映画政策にみる「外向性ナシヨナリズム」と

その背景——

飯島 智恵

プーラン・デーヴィの生涯の考察——インドの女性差別問題を中心に——

南 浩一

シャンカラの思想研究——『ウパデーシャ・サーハ

スリー』を中心に——

窪 明博

親鸞の浄土観

小倉 薫 ミーラーン・バーイーの忠誠

石井えり子 「ムーラデーヴァと性転換の秘薬」におけるインド

文化

野上 詩乃 ストゥーバの発祥と発展

横山 福寿 毘沙門天信仰の変遷

尾形 優 現代インドの混迷——宗教と政治の狭間で——

Ⅱ部

上野 純子 インド舞踏の世界観——*Abhinayadarpana*を中心

として——

神保 礼美 サティーから見るヒンドゥー社会の女性観

町田 陽祐 「主体性」——実存からの求心——

長澤 英明 板敷山大覚寺の伝説とその願い

大学院修士論文

貴貫 智裕 『大品般若経』における薩婆若

三澤 祐嗣 『マハーバーラタ』におけるサーンキヤの思想——

「モークシャダルマ編」における3種のグナについ

て——

相川 愛美 サティー観の歴史的変遷に関する研究

加藤 千絵 ナーラーヤナ・グルの思想研究——『洞察の花環』を

中心として——

烏力吉吉日嘎拉^{ウリジジリガ} 『金光明經』Suvarṇaprabhāsa-sūtra における陀

羅尼^ニ Dharaṇi^ニ について

伊藤 慶 ナータ派における身体観と「不死」観――

Gorakṣasāhita を中心に――

澤田 容子 アルタナリーシユヴァラ研究 ― プラーナ聖典を

中心とする成立過程の一考察――

板野 義弘 『サータナ・マラー』ヘールカ成就法の研究

橋爪 浩昭 『雑阿含経』「五蘊誦」と『相應部』Khandavagga
の anattam

井原 知子 ニヤーヤ学派における upamāna について――

Nyāyasūtra から Nyāyavārtika までの定義の変化
をめぐって――

東洋学論叢 第34号

(東洋大学文学部紀要 インド哲学科篇 第62集)

平成二十一年三月三十日 印刷

平成二十一年三月三十日 発行 [非売品]

発行所 東洋大学文学部

東京都文京区白山五―二八―二〇

電話 インド哲学科〇三三四五七五

印刷 ヨシダ印刷株式会社

東京都墨田区亀沢三―二〇―一四

電話 〇三―三六二六―一三〇一

BULLETIN OF ORIENTOLOGY

Bulletin of the Faculty of Letters

Toyo University

NO. 62

March, 2009

Series of

INDIAN PHILOSOPHY

XXXIV

CONTENTS

IBUKI, Atsushi : A Biographical Study of the Main Members
of the East Mountain Teaching (Part One) (1)

IWAI, Shogo : A Study of *Paṭhamasambodhi* : Japanese Translation and
Notes of Parinibbānakathā (Part One) (95)

NUMATA, Ichiro : The Various Meanings of *vyavahāra* (105)

HASHIMOTO, Taigen : A Study of the Gorakhnāth's *Bānī* :
Text, Japanese Translation and Notes of *sabadī* 101-150 (119)

MIYAMOTO, Hisayoshi : A Japanese Translation and
Notes of The *Vārāṇasī-māhātmya* in *Matsyapurāṇa* (3) (134)

Published by

TOYO UNIVERSITY

Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo